修士論文(要旨)
2017 年 1 月

健常者の知的障害児・者との交流経験内容についての研究

指導　山口　創　教授

心理学研究科
健康心理専攻
215J4057
樋口芽衣

Master’s Thesis(Abstract)
January 2017

A Study of Healthy Subjects' Experiences Interacting with People with Intellectual Disabilities

Mei Higuchi
215J4057
Master’s Program in Health Psychology
Graduate School of Psychology
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Hajime Yamaguchi

目次

第 1 章　はじめに
1.1　障害の捉え方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
1.2　知的障害児・者に対する偏見の研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
1.3　障害理解教育に関する研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
1.4　知的障害児・者と関わるボランティアに関する研究・・・・・・・・・・・・・・ 4
1.5　調査の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

第 2 章　質問紙調査
2.1　方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
2.2　結果と考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

第 3 章　面接調査
3.1　方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
3.2　結果と考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

第 4 章　総合考察
4.1　「知的障害児・者に対する 5 次元の態度尺度」に関する考察・・・・・・・・・・・ 22
4.2　知的障害児・者と交流がある健常者への面接調査に関する考察・・・・・・・・・・ 23
4.3　結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

謝辞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
引用・参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27

第１章

はじめに

一般に、健常者の知的障害児・者に対する態度・意識の形成には、知識や交流、経験が重要であることがわかる。この多次元性は、多くの研究で言われてきたことである（生川・梅谷・前川,2006)。また、幼少期にどのような経験･学習をしていきていたかも重要である(戸田,1993;益山・東原・河内,2003)。知識形成には障害理解教育が重要であるが、「障害児・者はかわいそう」などという安易なイメージを抱かせることのないように、十分な内容精査が必要とされる。交流経験が必ずしもプラスのイメージ形成に繋がるわけではないことも念頭に置いておくべきだろう。しかし、教育化効果の高い障害理解教育を受け、それと並行した交流を経験することにより、態度やイメージが肯定的になることもある(徳田・水野,2005)。すなわち、知的障害児・者への好意的で肯定的な態度・イメージは、個々人の経験内容に大きく左右されるものなのである。

では、自主的にボランティアをしている人などは、知的障害児・者に対しポジティブなイメージを持っていると考えられるが、それはどのような知識を持ち、どのような経験をした結果なのだろうか。また、保育実習などで交流を余儀なくされた人もイメージ変容するのであれば、そのイメージ変容した経験はどのようなものだろうか。

そこで、知的障害児・者と交流経験のある人に対し、半構造化面接を行い、過去に知的障害児・者とどのような交流経験があり、どのような態度・イメージを持っているのかを明らかにすることを目的とする。これらを明らかにすることにより、健常者と知的障害児･者との間の、好意的で肯定的な関係形成に繋なげていけるのではないだろうか。また、よりよい障害理解教育につなげることができるのではないだろうか。知的障害児・者への肯定的な態度や好意的なイメージが形成される具体的な交流経験の内容を示し、今後の知的障害児・者への偏見の解消につなげていきたい。

第２章　研究の目的

障害児・者に対し交流経験のある人が、過去にどのような経験しまたそれに付随する気持ちを明らかにすることを目的とする。それぞれの健常者の気持ちに着目し、障害者との交流でどのような気持ちの変遷があったかを明らかにする必要がある。

そこで、本研究では、質問紙調査と面接調査を行った。質問紙調査は、全体的な態度・イメージがどのようなものかを知ることを目的とした。また、知的障害児・者との交流経験がある人を対象とし、それらの人に対し面接をすることで、「過去の交流経験の内容を明らかにすること」･「現在の交流経験の内容を明らかにすること」「知的障害児・者に対しどのような態度・イメージを持っているのか」を明らかにし、健常者と知的障害児・者のよりよい関係についての考察を深めていくことを目的とする。

第３章　研究方法

1.　調査対象者

本研究では、量的研究と質的研究の両者を用いた。質問紙調査は、面接調査の裏付けとして量的データを測定するために行った。

東京都都内Ａ大学在学中で心理学系の講義を履修している学生と面接対象者の４名を含めた、

114 名（男性 36 名、女性 78 名）を対象とした。

2. 調査期間

2016 年 8 月から 2016 年 1 1 月末まで

3. 調査手続き

質問紙調査は、無記名による自記式質問紙調査を集団で実施した。

面接調査は、研究者が指定したプライバシーの保たれる場所で、インタビューガイドを用いた半構造化面接を対象者 1 回ずつ行った。聴取した内容は対象者の同意を得てレコーダーに録音した。

4. 質問紙調査尺度

生川(1995)による知的障害児・者に関する 5 次元の態度尺度を使用した。尺度は、“実践的好意”(6 項目)“能力肯定”(7 項目)“統合教育”(4 項目)“地域交流”(7 項目)“理念的好意”(4 項目)の 5 次元の態度尺度の 28 項目からなる尺度で、「反対(1 点)」～「賛成(5 点)」の 5 件法で回答してもらった。また、原文では、「知恵おくれ」など現代的でない言葉が使われているので、適宜「知的障がい」など一般的な言葉に修正した。

5. 面接調査の内容

知的障害児・者との交流の内容・経緯、また過去に知的障害児・者とどのような関わりがあったか、現在どのような関わりをしているかを問う質問であった。このインタビューガイドを用いて対象者へインタビューを行った。

6. 分析方法

質問紙は、知的障害児・者と交流経験のある人と知的障害児・者と交流経験のない人で、対応のない t 検定を行った。面接調査の分析には、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(木下、2003)(Modified Grounded Approach)(以下 M-GTA)を用いた。

第 4 章　結果

1. 質問紙調査の結果

本研究では、生川(1995)の 5 次元の態度尺度について、交流経験有り群と交流経験無し群間で下位尺度ごとに t 検定を行った。その結果、「実践的好意得点」の平均点が、交流経験のある方が 1%水準で有意に高かった($t[112]=3.412, <.01$)。また、「地域交流得点」は有意傾向が見られた。

2. 面接調査の結果

中心となる概念(コア概念)は【違いを理解した態度】で、障害者に対し、肯定・否定など特別な感情は抱かないと定義する。【違いを理解した態度】につながるカテゴリーとして、＜幼児期の交流体験＞＜幼少期の学習・交流体験＞＜分離された環境＞＜青年期の再交流＞＜再形成される態度＞がある。それらの 5 つのカテゴリーに繋がるものとして、≪障害児・者について考える≫≪障害認識を持ったうえでの交流体験≫≪戸惑い体験≫≪戸惑い解消行動≫≪ポジティブ体験≫の 5 つのサブカテゴリーが抽出された。また、これらを構成する概念として、

「友達としての関わり」「遠目の観察」「『障害』を知る」「親からの影響」「相手の状況次第での関わり」「特別支援学級の生徒との交流」「疑問と疑問解消行動」「特別感のある交流体験」「伝わらない経験」「指導する立場からの戸惑い」「一般認識との違いの戸惑い」「積極的交流の試み・助言を求める」「一緒に楽しむ」「指導者としての喜び」「障害児・者の親からの感謝」「今までの否定的な態度・イメージが変化する「障害があっても普通である」「障害者を障害者としてみる」「知り合いでない知的障害児・者との関わり」の 19 の概念がある。

第 5 章　総合考察

交流有り群のほうが、交流無し群よりも、実践的好意得点と地域交流得点が高い傾向にあった。交流有り群でこの 2 つの因子が有意であったということは、やはり実際に交流をしていたからこそ、障害者が身近な存在であり交流することや地域で暮らしていくことに抵抗感が薄いことが示唆される。

Okolo&Guskin(1999,飯田・佐藤・赤松・嶋田(2005)は単純な交流はマイナスイメージを残すのみとなると報告していた。だが、健常児が障害を認識するためには交流が重要である。今回の調査で幼少期にネガティブな交流があっても青年期に再交流することにより、認識が変化することが分かった。そのため、青年期の交流の重要性が示唆された。しかし、ネガティブ体験をした者が、自主的に再交流することは難しい。そのために、学生時代に正しい知識を得ることが重要なのではないだろうか。

今回の調査で幼少期に交流があり、世の中に障害を持っている人がいるということを認識している人は、受容的行動として、青年期に再び交流をした。その際に、もともと持っていた障害者への認識が変化し、障害者との距離が近づいたと考えられる。また、自分と全く違う人を障害者として見ていた対象者の認識が変化した。障害が、障害によりできないことがある人という意味に変化したことが伺える。その結果「違いを理解した態度」が形成されたのではないだろうか。面接対象者の「障害」の意味変化は捉えるべき重要な部分である。質問紙調査の交流有り群のなかにもこのように「肯定でも否定でも態度」持ち障害を受容的に捉えている人がいると考えられる。一方で、交流無し群は、障害者を自分とは違う存在と感じ距離を置いているのではないだろうか。また、幼少期の交流がネガティブなものであり、交流の機会がないまま大人になることで、より障害者を敬遠する可能性がある。一般に日本の障害理解教育は進んでないと言われており、正しい知識を得る機会も少ない。社会は共生社会を目指しているが、そういう動向に比べ、交流の機会や障害理解教育は、依然として充実していないと考えられる。

今回の研究により、健常者と知的障害児・者のよりよい関係のためには、交流が重要であることが改めて示唆された。また、最初の交流がネガティブなものでも、何度か交流することで障害者が身近になり、障害者に対する否定的な感情は減少することが伺えた。そして健常者は障害者を必要以上に特別視しない態度である「違いを理解した態度」を得ることが明らかになった。

今後は、より多くの健常者が「違いを理解した態度」で障害者と接することができるように、障害理解教育の充実を図るとともに、健常者と障害者が容易に交流できる場の設定が必要であると考えられる。

引用文献

飯田綾・斉藤寛・赤松亜紀・嶋田洋徳(2005). 自閉症的行動特徴への態度に接触機会が及ぼす影響, 日本行動療法学会大会発表論文集 31,152-153

生川善雄(1995). 精神薄弱児(者)に対する健常者の態度に関する多次元的研究, 特殊教育学研究 32,11-19

生川善雄,梅谷忠勇,前川久男(2006). 知的障害児に対する態度に関する文献研究 - 態度の多次元研究に焦点をあてて - , 千葉大学教育学部研究紀要 54,15-23

木下康仁(2007). ライブ講義 M-GTA　質的研究法　修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)のすべて, 第 1 版 5 印,弘文堂,2007

戸田有一(1993).　統合保育における軽度精神発達遅滞幼児に対する健常幼児の態度の研究, 発達心理学研究　4,25-33

益山篤子・東原文子・河内清彦(2007)　通常学級における知的障害児に対する級友の態度に及ぼす接触及および性別の影響, 障害科学研究, 32, 1−10

徳田克己・水野智美(2005). 障害理解 - 心のバリアフリーの理論と実践 -　誠信書房